

高温条件下における農作物等の技術対策

福島県農林水産部農業振興課

仙台管区気象台は、令和3年8月16日に「高温に関する早期天候情報」を発表しました。

農作業時は熱中症対策など健康管理に十分注意するとともに、農作物の管理や家畜等の暑熱対策を徹底しましょう。

高温に関する早期天候情報（東北地方）

令和3年8月16日14時30分 仙台管区気象台 発表

東北地方 8月22日頃から かなりの高温

かなりの高温の基準：5日間平均気温平年差 +2.6℃以上

東北地方では、向こう2日間程度は気温が平年並か低く、その後は暖かい空気が流れ込みやすいため平年並か高く、22日頃からはかなり高くなる可能性があります。

農作物の管理等に注意してください。また、急激な気温上昇の際は熱中症にかかりやすくなります。屋外での活動等では飲料水や日陰を十分に確保したりするなど熱中症対策を進め、健康管理等に注意してください。

なお、1週間以内に高温が予測される場合には高温に関する気象情報を、翌日または当日に熱中症の危険性が極めて高い気象状況になることが予測される場合には熱中症警戒アラートを発表しますので、これらの情報にも留意してください。

1 農作業時の留意点

高温条件下における農作業では、作業者の体調管理に十分注意しましょう。特に、気温が高くなると、熱中症を起こしやすくなるので注意が必要です。このため、作業者の健康管理に配慮し、作業環境の改善に努めましょう。

(1) 留意点

ア 農作業はなるべく暑い時間帯を避けて行い、休憩を頻繁に取りましょう。

イ 汗で失われる水分や塩分は、こまめに補給しましょう。

ウ 通気性の良い作業衣や帽子を着用するなど、服装に注意しましょう。

エ 簡易の移動性テントなどを使用し、なるべく日陰での作業ができるよう工夫しましょう。

(2) 応急処置

熱中症が疑われる症状が現われた場合は、応急処置として涼しい場所で身体を冷し、水分及び塩分の摂取等を行いましょ。また、速やかに医師の診察を受けるようにしましょう。

2 水 稲

登熟期間に継続して高温に遭遇すると、白未熟粒の多発により品質が低下します。
このため、水管理を徹底し、品質の確保に努めましょう。

(1) 水管理の徹底

登熟期間は、地温上昇を抑え根の活力維持に効果のある飽水管理とします。

(飽水管理：田面は湿っており、溝、足跡などに水がたまっている状態)

早期落水は、乳白粒等の発生による品質低下の要因となるので、落水は出穂後30日以降を目安とします。

(2) 病虫害防除

本年は、斑点米カメムシ類の発生が多くなっています。斑点米カメムシ類の被害が予想される地域では、薬剤による防除を徹底しましょう。

(3) 収穫作業

本年の出穂期は平年よりやや早く、登熟期間に高温が続いた場合は成熟期が早まることが予想されます。刈遅れによる品質の低下が懸念されますので、適期収穫に努めましょう。収穫の目安は、籾の黄化率が80～90%になった時期になります。

3 大 豆

(1) 干ばつ対策

大豆は要水量の多い作物で、開花期～子実肥大初期にかけて土壌が乾燥すると落花、落莢が多くなり減収します。このため、乾燥が続く土壌が白化したり、葉の裏返りや葉巻が観察される場合は、暗渠を閉じてほ場周囲の明渠や畦間にかん水しましょう。

かん水は、夕方に2時間程度を目安に行います。なお、かん水は一度に行わず、数回に分けて徐々にほ場全体に水が行き渡るようにします。

(2) 病虫害防除

高温年にはカメムシ類やダイズサヤタマバエの多発生が予想されますので、着莢期(8月中旬)～子実肥大盛期に10日間隔で2～3回防除を行いましょ。また、紫斑病対策としては、開花期後20～40日間で1～2回防除を行いましょ。

4 野 菜

(1) 施設の温度管理

施設では高温障害回避のため側面と妻面をできる限り解放して風通しを良くしましょう。

きゅうり、トマト等において高温による生長点のしおれが見られる場合は、日中の暑い時間帯に遮光資材を展張して、施設内温度や植物体温度の低下に努めましょう。

また、秋野菜の育苗では、苗の生育状況に応じて遮光資材を展張し、施設内・植物体の温度低下に努めましょう。

(2) 草勢の維持

きゅうり、トマト、さやいんげん等の果菜類やマメ類は、不良果や不良莢を早めに摘み取り、株への負担を軽減し草勢維持に努めましょう。また、老化葉の摘葉を行いましょ。

追肥は、草勢が低下しているほ場では、液肥やペースト肥料の土壌かん注や葉面散布を行い、早期の草勢回復に努めましょう。

(3) かん水

かん水は、朝夕の気温が低い時間帯に行いましょ。かん水チューブを用いた少量多回数が望ましい方法です。なお、畦間かん水を行う場合は、長時間水をためないように注意しましょ。

(4) 敷きわら等

露地栽培では、通路等への敷きわら等を厚くし、地温上昇と乾燥を防止しましょう。

(5) 生理障害対策

トマトやピーマンの尻腐れ果対策として、かん水による土壌水分保持に努めるとともに、カルシウム剤の葉面散布を行いましょ。

(6) 病虫害防除

かん水後は一時的に多湿となり、きゅうりの炭そ病や褐斑病、トマトの葉かび病等の病害が発生しやすくなります。また、乾燥時はハダニ類等害虫類の発生が多くなりますので、農薬の使用基準を遵守して適期防除を行いましょ。

(7) 収穫物の鮮度保持

きゅうりでは、フケ果（ス入り果・先膨れ果）の発生が懸念されます。収穫物を直射日光に当てない等、品温の上昇を防ぎましょ。また、鮮度パックの使用等により品質保持を心がけましょ。

5 果 樹

夏期の高温・乾燥条件下では、樹体や土壌からの蒸発散量が増え、果実の肥大停滞や樹勢低下、果実や枝幹部の日焼け、葉焼けなど様々な障害が発生しやすくなります。特に、まとまった降雨があった直後は、根の機能が低下しているため注意が必要です。

草刈りやマルチ、また今後乾燥が続く場合は必要に応じてかん水を実施し、土壌の水分管理を徹底ましょ。

(1) 草刈り、マルチ

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょ（草生園における地表面からの蒸発散量は、刈り草をマルチした場合は、草刈りしない場合の約半分とされています）。

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょ。

(2) かん水

盛夏期における果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度であるので、1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施ましょ。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くましょ。

ただし、ももでは収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやすいため、かん水が必要な場合は早めに実施ましょ。

なお、水利の確保が困難なほ場では、スピードスプレーヤーや貯水タンクを利用したかん水も有効です。

(3) 新梢管理

徒長枝などの不要な枝はせん除して、水分の消費を防ぎましょ。ただし、過度のせん除は樹勢低下を招くため、切りすぎないように注意ましょ。

主枝や垂主枝の背面に発生した徒長枝や発育枝は、強い枝を中心に除去し、日焼け防止等のため、弱めの枝を適当な間隔で配置ましょ。なお、もも等では基部葉を残してせん除ましょ。

(4) 適期収穫

収穫前から収穫期にかけて、降雨などにより急激に土壌水分が増加した後や、高温・乾燥条件で経過する場合は、果実の成熟に影響が大きいため、果実の着色、地色の抜けや果肉硬度の低下など成熟状況に注意し、収穫が遅れないように注意ましょ。

また、収穫時の果実温が高いと果実が軟化しやすい傾向にあるため、収穫は気温が低い時間帯に行い、収穫後は涼しい場所に保管ましょ。

(5) 病虫害防除

高温下においては害虫の世代交代が早まり、増殖が助長される傾向にあります。特に、ハダニ類が急激に増加しやすいため、発生密度を観察し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）になったら速やかに防除を行いましょう。

なお、主要害虫の防除に当たっては、発生予察情報を参考にしてください。

6 花き

(1) 施設栽培の温度管理

施設栽培では高温障害回避のため側面と妻面をできる限り解放して風通しを良くしましょう。また、日中の暑い時間帯は遮光資材で遮光し、施設内温度や植物体温の低下に努めましょう。

(2) かん水

キク、リンドウ等の露地栽培では、畦間かん水等を定期的の実施しましょう。畦間かん水を行う際、長時間水をためないように注意しましょう。

なお、かん水は日中の高温時を避け、夕方から朝にかけての涼しい時間帯を利用して行いましょう。

(3) 遮光

リンドウでは高温や強日射による開花遅延や花弁焼け等が懸念されるので、寒冷紗や遮光資材が利用できる場合は、30～50%程度の遮光を行ない、開花の遅れや品質低下を防止しましょう。

また、育苗時期にあたるストック等では、高温による蒸れや徒長が懸念されるので、遮光資材の利用や施設内の換気を実施して、良質な苗の生産に努めましょう。

(4) マルチ等

敷きわらや白黒ダブルマルチの積極的な活用によって、地温上昇や土壌乾燥を防ぎましょう。

(5) 葉面散布

高温期は、カルシウム欠乏による葉先枯れ症状（トルコギキョウ、リンドウ、ユリ等）や鉄欠乏による葉色の退色（ユリ、バラ等）といった生理障害が生じやすくなります。生育状況に応じて葉面散布剤を散布し、養分補給を行いましょう。

(6) 病虫害防除

アブラムシ類、ハダニ類等は、高温乾燥条件で発生しやすくなります。発生状況をこまめに把握するとともに、適期防除に努めましょう。

7 飼料作物

牧草は盛夏期の高温・少雨の環境下では生育が滞り気味になりますので、刈り取りは適正な間隔をおいて実施し、秋期の草量確保のため、2番草刈り取り後の追肥は、肥効が確保できるよう盛夏期を過ぎた後に行いましょう。

8 家畜・家禽の暑熱対策

夏期の高温環境下では、家畜は体温上昇を防ぐために呼吸数や血流を増加させてエネルギーを余分に消費する一方で、飼料摂取量が減少するために生産性が低下します。このため、家畜の体温上昇を抑制するため暑熱対策を徹底しましょう。

また、家畜の姿勢、採食量や反芻行動など家畜の行動をよく観察し、異常家畜の早期発見・早期治療に努めましょう。

(1) 畜舎内の飼養環境の改善

- ア 畜舎の窓・扉を開放し、換気扇、送風機により送風、通風促進を図りましょう。
また、畜舎入り口やダクトファンの前方に細霧装置を設置し、噴霧するなど畜舎内の体感温度を下げる工夫をしましょう。
- イ 扇風機やダクトファンにより、家畜に直接風を当て、家畜の体感温度の低下に努めましょう（牛に風速2m/秒の風を当てると体感温度を約8℃下げる効果があります）。
また、飼養密度を下げることも、家畜の体感温度の低下に効果があります。
- ウ 寒冷紗等を利用して畜舎内への直射日光を遮光し、畜舎内の温度上昇を防ぎましょう。
- エ アンモニアの発生や高温多湿とならないよう、除糞、敷料の交換をこまめに行い、畜舎内を清潔に保ちましょう。
- オ 家畜をよく観察し、特に暑熱のダメージが大きい家畜については、畜体へ直接水をかけるなどの応急措置を行いましょう。

(2) 飲水及び飼料の管理

- ア 新鮮な水を十分に飲水できるように、給水施設を清潔に保ちましょう。
また、バルククーラーなどを活用し冷却水を与えるなどの工夫をしましょう。
- イ 牛は採食すると、ルーメン発酵による熱が発生します。質の劣る飼料はルーメン内の発酵熱を高めるため、良質な飼料を給与しましょう。
また、早朝及び夜間などの涼しい時間帯での給与や、飼料回数を増やすなどの工夫をしましょう。
- ウ 高温時は、発汗等により無機質の要求量が増えるので、体内代謝を正常にするためにも固形塩や主要ミネラル類をやや多めに補給しましょう。
- エ 夏期は食べ残した飼料が飼槽内で変敗しやすく、また変敗した飼料からハエ等の衛生害虫が発生することがあります。このため、食べ残した飼料は早期に片付け、飼槽は清潔に保ちましょう。
また、給与前の飼料は湿気が少ない冷暗所で保管し、変質を防ぎましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 TEL 024(521)7344

○農業振興課ホームページ

以下のURLより他の農業技術情報（生育情報、気象災害対策、果樹情報、特別情報）をご覧ください。

URL：<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>